

八戸地域におけるシネマ文化の継承

八戸工業高等専門学校 産業システム工学科
環境都市・建築デザインコース5年 橋本 さくら

1. はじめに

地方都市の人口減少・それに伴った中心街の衰退
：全国的な問題
八戸市中心街でもデパートや映画館などの廃業が相次ぐ

市民が中心となって行う自主上映会などの活動が活発化

コミュニティシネマ活動 と呼ばれる

2. 目的・調査方法

- 八戸市および近郊地域におけるコミュニティシネマ活動について、
- 文献調査、コミュニティシネマ活動への参与観察および関係者へのインタビュー調査により、
- 地方都市における市民主体の**コミュニティシネマの“場づくり”**の
意味・課題・展望について考察する

3. 国内の映画文化について

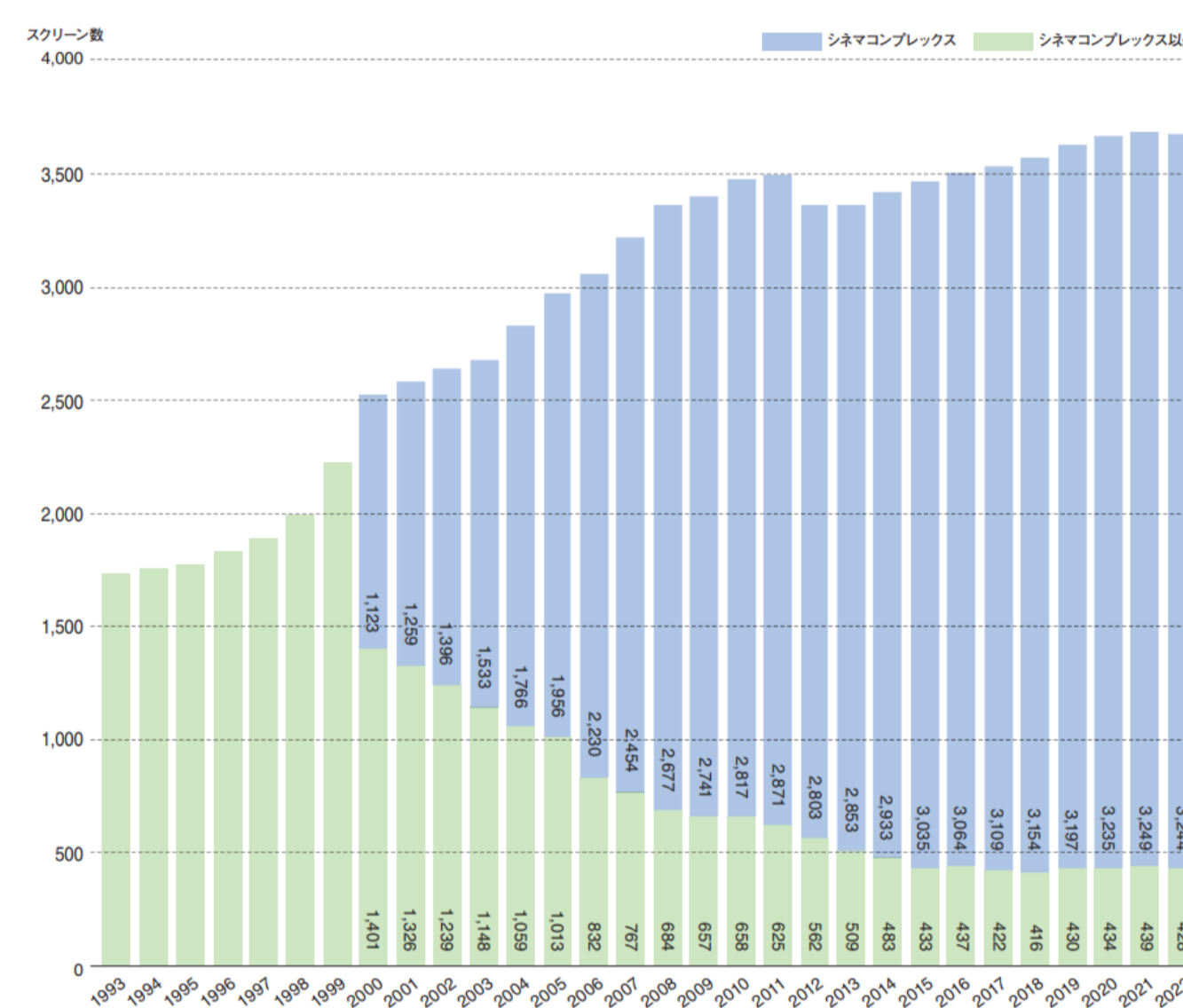
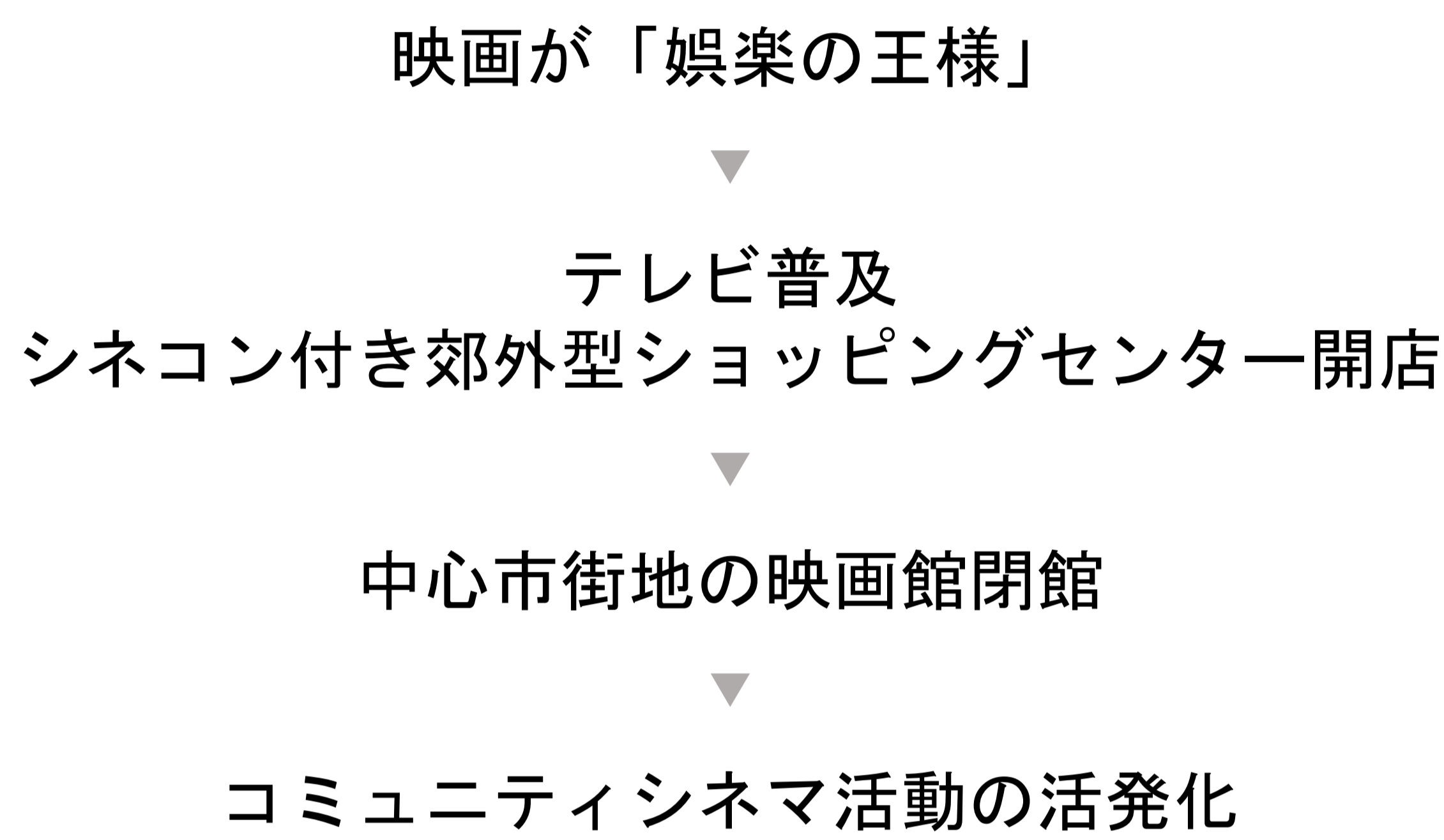


図1 国内のスクリーン数の推移

—「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)、『映画上映活動年鑑』(コミュニティシネマセンター)参照

- シネコンのスクリーン数は増えているがシネコン以外は減少
- 映画産業全体は東宝、松竹、東映の3つのメジャー会社が大半を握る寡占状態
- 多様な映画を見る機会が失われつつある

4. 八戸の映画文化と近郊地域のコミュニティシネマ活動を支えるネットワーク

表2 八戸地域の映画文化

期	八戸地域における映画文化の変遷	備考
I	最盛期には八戸市内で7館の映画館が営業 映画が地域で最も一般的な娯楽 映画館が社交場としての役割も担っていた	ラブはちのへ運動(1975) テレビの普及により映画衰退
II	TOHOシネマズおいらせ下田 オープン(2001) 八戸市内に残っていた2つの映画館が閉館 市民主体の映画館再生/ フォーラム八戸 オープン(2003) 国内でも映画がフィルムからデジタルに移行を開始 (2013年にはほぼ完了)	はっち供用開始/ 東日本大震災(2011) サブスクリプション普及 新型コロナウイルス流行
III	フォーラム八戸閉館(2023)・上映会開催が活発化	八戸市美術館閉館(2022)

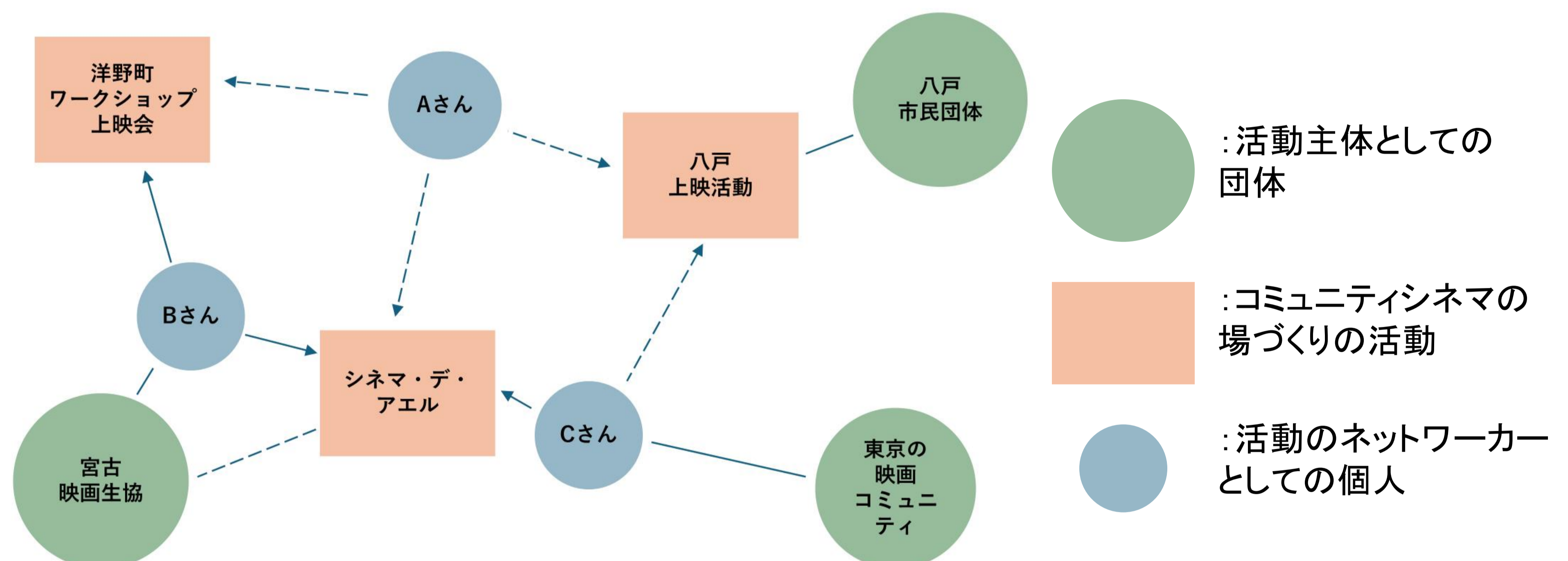


図2 コミュニティシネマ活動を支えるネットワークのモデル

5. まとめ

画一的ではない、様々な作品を見る機会を保障する場となっているミニシアターやコミュニティシネマ活動は、
文化芸術振興や地域振興という観点から、継続的に支援する必要がある

まさに映画館があり、いつでも受動的に映画鑑賞ができるという環境
がなくなる

市民出資での映画館の立ち上げやコミュニティシネマ活動の活発化など
市民が主体性を持った行動をとる傾向が強まる

- 常設映画館を新たに作ることは難しい
- せめて活動者を絶やさないように自分にできることを
→映画好きの人々は独自のネットワークを構築、上映活動を通して
自分たちの大切にしている“場”を保護
- 国などの補助金は“場づくり”ではなくて“活動”に対して与えられる
→“場づくり”に先立って市民の主体的活動が重要

コミュニティシネマ活動のみで地方都市の中心市街地の衰退に歯止めがかかるわけではないが、市民の問題意識・地道で継続的な活動が、市民文化的な活性をつくり、ひとつの解決の糸口となることに期待できるのではないか

本調査にご協力いただきました 熊谷拓治様 有坂民夫様 櫛桁一則様 小向光様 に篤く感謝申し上げます。